

第35回 君子、あやうきに…

IT生

大阪北部地震が起きた。

今年1月から警鐘を鳴らし続けていた当方としては忸怩たる思いだ。

1・17特集では一面をさいて書いたが、兵庫県の防災監ですら読んでいなかったという。何をかいわんや、である。

23年前に神戸で不意打ちをくらった時代とは明らかに状況が異なるのに、相変わらず「地震が来るとは…」というような顔をしている。今回の地震で象徴的な被害が、学校の塀である。管理していた高槻市には、ばかばかしすぎて言葉もない。

亡くなった少女はもう還って来ない。この事実は動かしがたい。何度、誰が、現場で供養しようとも、少女は還ってこない。構図からいえば、ずさんきわまりない、行政運営のなれの果てだが、ひとつ大きな視点が論じられていない。



東日本大震災以降、各地では住民による避難計画づくりが進んでいる

行政がどうあろうと、住民が危険箇所を調べ、周知していれば、壁が放置されていたとしても、被害は免れていたはずだ。ボンクラ行政に身を任していたのでは、いくつ命があっても、足りないことをもうそろそろ、住民は気づくべきだろう。

高槻市の隣の摂津市では、自治会レベルの避難計画づくりが、行政の支援のもと、自治会主導で進んでいる。しかも、避難計画づくりのために想定されているハザードは高槻市と同じ、淀川の水害である。何度も報道されているにもかかわらず、関心をもてなかったのはなぜだろうか。自治会レベルの避難計画など、3カ月もあればできるのだ。

一度、つくってしまえば、住民の頭のなかに、絶えず防災に気を配る装置ができる。そうすれば、自然と行政と住民の役割分担ができていくものだ。このゆるやかで良きサイクルさえできれば、災害なぞ怖くはない。

それでも犠牲者はでるかもしれないが、こういう状況ができてこそ、犠牲者追悼の意味もあるというものだ。うわつつらだけ悲しむふりをして、また元の木阿弥では、少女は浮かばれない。

(平成 30 年 6 月)